

ば雲があっても地表の温度を推測することができる。しかしこれには2つの困難がある。一つはこのような波長の長い放射に対しては地表の射出率がまちまちであること、もう一つは測器の開発の問題である。しかしこの始めの理由を逆用し、地表の射出率を測定することによって地表の状態、例えば流氷の分布を観測できるようになるかもしれない。

衛星は太陽常数を測定するのに都合のよい位置にある。太陽からの放射のうち紫外域のものはかなり変動し、これが大気にいかに影響するかは重要である。

衛星の場所における夜明けあるいは夕暮の場合に、大気を通過してくる太陽光の O_3 の吸収帯 2,55~3,500 Å と window 3,700~4,000 Å の放射の強さの比から太陽光が通過した気層の中の O_3 の量を推測することができる。太陽のあらゆる高度についてこのような測定をすることによって大気中の O_3 の分布を調べることができる。また雲の上面によって反射された太陽光について同様の測定をすることによって O_3 の分布を調べることができる。いずれこのような測定も行われよう。

放射利用の変った方法として、海面にうつった太陽の像の散乱の模様を定量的に測定することによって、海面の荒れ模様を推測することができようになるかもしれない。

いし、人間衛星から美しく眺められる地平線上の明るい気層の厚さの観測から地上 20 km の高さに達しており、薄明の原因と考えられているエアロゾルの分布を推測することができ、その気象への影響が明かになる。

むすび

WMO 主催の気象衛星セミナーにおいて受けた講義の内容をかなりくわしく記述した。講義と実習は、豊富な衛星写真にもとづいて行なわれたが、この報告にのせたのは、そのごく一部なので、本文の中に理解できにくい点があったかも知れない。近いうちに出版される完全な議事録は、その点を解決してくれることと思う。

このセミナーに出席し、多くの衛星写真から、大中小の各規模の気象系の姿を、連続した形でたしかめ得たことは、われわれ天気図解析や天気予報の仕事にたずさわる者にとって大きな収穫であった。ここで得られた知識はただちに現場に適用することができよう。いまのところ日本では衛星の観測結果は、電報で入手できるだけなので、利用価値は少ないが、将来 APT が備えられれば、天気図解析と予報に、大きな威力となることは間違いない。

おわりにこの報告のために貴重な紙面を提供していただいた天気編集部に謝意を表したい。

日本気象学会関西支部だより

1. 昭和39年度第3回常任理事会を1月27日15時から大阪管区気象台で開催。主なる議題は、5月の全国大会についての準備の進捗状況の報告、およびシンポジウムのテーマとしては、「成層圏」とすることになり、その旨本部へ意見を申出ることになった。

2. 1月月例会、「世界の気象界の現状」が、1月13日大阪管区気象台会議室で、気象庁予報課主任予報官大井正一氏を迎えて、山元竜三郎理事司会の下で、「ヨーロッパの気象界の現状」についての講演会により行なわれた。これは、支部月例会に世界の気象界の現状の紹介をとり入れようとする試みの第1回である。

3. 四国地区月例会は、昭和40年3月3日（水）13時~16時30分、高松市六番丁、香川県総合会館会議室で、「雨量予報」をテーマとして開催される。

話題およびその提供者は次のとおり。

- (1) 台風のスパイラルバンドと雨予報
高松 田中 貞三 (30分)
- (2) 室戸レーダーの雨量予報への利用(現状と問題点)

室戸岬 橋本 義愛 (30分)

- (3) 雨量予報の現状と将来

気象庁 石原 健二 (60分)

- (4) 気象衛星による雨の予報

大阪 中島暢太郎 (60)

4. 2月月例会は、昭和40年2月24日（水）13時30分~17時00分、大阪管区気象台会議室で、風を題目として開催される。

文献紹介

- (1) 風速の高さによる変化について

京大 吉住 禎男

- (2) 風の局地性について

京大 宮田 賢二

講演

- (1) 風の観測に関する最近の技術と問題点

京大 光田 寧

- (2) 気象衛星による風の観測

大阪管区 中島暢太郎